最後にロンドン塔に
～英国ツアー一人旅⑪

ブラジルで開かれたサッカーワールドカップ。日本は一勝もできず予選敗退という不本意な結果に終わったが、一つ不思議に思ったことがある。各国は国名・国旗で出場したのに英国だけイングランドとして出場、旗も英国国旗のユニオンジャックではなかったことだ。

仮にイングランド地方の代表チームであってもイギリスとして登録されるべきだろうと考えていた時、九月十八日にスコットランド独立を問う住民投票のニュースが目に入った。かつては四つの王国だったとはいえ、世界の大英帝国、先進国を代表する英国がこんな地域紛争を抱えているとは思わなかった。

さて、今回の英国ツアー、福岡を出発し、ソウル経由でロンドン郊外のヒースロー空港に着いた。ロンドン市内には入らず、空港横のホテルに一泊して翌日から五日かけてイングランド地方を観光し、最後にロンドンの市内観光。その目玉は護衛兵と一緒にロンドン塔に入場すること。

この護衛兵は陸軍生活二十二年のエリート

前回の家族とのロンドンの旅では、ロンドン塔には余りの長蛇の列だったため入場しなかった。そのことも今回、ツアーに一人で参加した理由である。

幸い、訪れた六月十日はエジンバラ公の誕生日で、祝砲が鳴り響き、護衛兵も写真のように特別な服装。自分が余りにみすぼらしく見えるとはいえ、思い出の記念写真がとれ、一人、悦に入る。

名称から高い塔を想像していたが、ロンドン塔は写真のホワイトタワーと呼ばれる、高さ二十七メートル余の建物が中心。ここには中世の武具が展示され、二階は礼拝堂になっている。夏目漱石が明治三十三年にこの地を訪れ「倫敦塔」という短編を書いているが、その中心は幽閉、処刑の場。

ロンドン塔は一〇六六年に即位したウイリアム一世の居城として建設され、その後、要塞となり、十三世紀には監獄に転用される。そして中世の王室の血塗られた歴史の場となる。ホワイトタワーの周囲にはさまざまな建物があり、その一つ、ジュエル・ハウスには何億円もするであろう王冠や王室の宝飾品が展示してある。

これらを見て回りながらふと思ったのは、ロンドン塔に限らず英国の文化遺産の多くは王室と貴族たちが残したもので、自分のような庶民の生活をうかがい知るものはほとんどないということ。これは英国だけではなく、人類の歴史は権力者の歴史であり、庶民は結果としてそれを支えたに過ぎない。

先進国の英国ですら武力は伴わないとはいえスコットランド独立紛争である。世界ではパレスチナ、ウクライナ、シリアなど武力紛争が各地に起きている。いつの日にもっと地球市民的レベルの人間に進化するのだろうか。

ロンドン塔の中心であるホワイトタワー